馬琴読本における「懲悪」の理念

―『弓張月』の阿公と『八犬伝』の船虫を手がかりに―

洪　晟準

はじめに

馬琴の読本作品において、むしろ悪人の描写の方が優れているということが、早く先行の研究者によって論じられている。[1] 親に対する孝、主君に対する忠、夫に対する貞のような、善と見なされる行為は、他の登場人物の言葉を借りて讃えられるが、しかしその人物が善人だからといって、必ず善報があるわけではない。むしろ、善人には悪人の陰謀による様々な試練が訪れる場合が多い。そうした苦難を乗り越え、めでたい結末を迎えることが善報なのであるが、馬琴は善報にはあまり力点を置いていないように見える。流行作者であった馬琴のこのような態度は、通俗的な読み物を創作する立場として、ある意味では当然なのかもしれない。読者は戯作を娯楽のために読み、作者は作品がより娯楽的であるように工夫を懲らす。馬琴も勧善懲悪思想や因果応報思想を作中に持ち込んで、読者に楽しみを与えることを第一に考えて読本を創作していたはずであり、特に勧善懲悪を描く際には、善人より悪人を丁寧に描くことで、作品の娯楽性を高めたのである。また、悪人を善人より印象的に描けば、勧善懲悪思想において、自ずと「勧善」より「懲悪」が強調されるようになるということは明白である。

本稿では、まず『椿説弓張月』（以下、『弓張月』と略称）の阿公と『南総里見八犬伝』（以下、『八犬伝』と略称）の船虫が、それぞれの作品の中で随一の悪女とされていることを分析し、両者が特に強烈に描かれている理由が「懲悪」

を強調するためであることを指摘する。そして、馬琴の考えていた正しい勧懲観について検討し、馬琴作品において「懲悪」を強く描くことで、それに対照する「勧善」も強調されていることを確認する。

一、『弓張月』の阿公と悪報

『弓張月』には、因果応報は明確に表れているが、勧善懲悪思想ははっきりと読み取ることができない。[2] 他の馬琴読本では、婦幼のために勧善懲悪を描くということを、序文や本文の中に、あるいは、附言などの文章を設けて、作者の言葉として記している。このように、馬琴は勧善懲悪思想を多くの作品中で明示しているにもかかわらず、『弓張月』では、勧善懲悪への言及が見られないのである。では、実際に『弓張月』には、勧善懲悪思想が取り入れられていないのだろうか。

『弓張月』の登場人物の一部は、善人と悪人とに振り分けることができる。例えば、源為朝と白縫と紀平治は善人、曚雲と阿公と利勇は悪人に分類することができる。両者を比較してみると、善人より悪人の人物像の方が鮮明に浮かび上がってくる。例えば、為朝は様々な苦難を乗り越え、最終的には琉球の争乱を平定するが、善人として讃えられるほどの活躍には至らない。一方、為朝と敵対関係に置かれている曚雲は、紛う事なき悪人ぶりを見せている。他の悪人も同様で、物語における彼等の存在感は著しい。

右に挙げた悪人のうち、阿公は最も極悪非道な人物である。彼女を極悪人たらしめている行為はいかなるものか。簡略にまとめると、次のようになる。

阿公は、将来、琉球国王に立てるべき赤子を盗むため、鶴亀兄弟とその母・新垣に近づく。この新垣は、中城按司・毛国鼎の妻で、男子を孕んでいる。産気づいた様子なので、阿公は鶴亀兄弟を薬屋に行かせ、新垣の腹を斬り、その中から胎児を奪い逃走する。

以上が『弓張月』における阿公の悪行である。新垣の腹から胎児を奪う場面を次に引用する。

> 項に掛たる袋の紐を、さと引断離て短に、あやとり結ぶ玉襷、が胸前摑んで、仰さまに突倒し、玉散る刃を閃かして、＝（月＋害）浅くかき破れば、叫苦と魂消るへ、手をさし入れて引出すは、思ふに違ずなり。
>
> （『弓張月』続編巻之五、第四十三回）

この段には、極めて残酷な挿絵が載せられている。そこ

には「新垣を殺して阿公胎内の子を奪う」と詞書があり、仰向けになって叫んでいる新垣の腹を斬って、胎児を取り出している阿公の様子が描かれている。『弓張月』の全挿絵を通して、もっとも残酷な場面を描いた挿絵と言っても過言ではない。

阿公が胎児を奪う段は、近松半二の浄瑠璃『奥州安達原』（宝暦十二年九月十日、竹本座初演）から趣向を取ったという指摘がある。[3]『奥州安達原』の四段目切「一ッ家の段」が該当する段である。次に、胎児奪取に関わる筋を簡略に記す。

前九年の役の後（八幡太郎義家が安倍氏を平定した後）のことである。安達原に、強盗殺人をして軍用金を賄う岩手という女性がいる。彼女の夫は安倍頼時で、この軍用金は、義家への復讐のための資金である。岩手は皇弟・環（たまき）の宮（みや）に仕えている。ある日、環の宮の止声病の治療薬として、胎児の鮮血が要ることを知った岩手は、ちょうどその時家に泊っていた妊婦・恋絹（こひぎぬ）の腹を斬って胎児を奪う。ところが、恋絹は自身の娘であることが判明し、泣き悲しむ。そして、環の宮は実は義家の子・八つ若であったことも明らかになり、自らの復讐の計策が水の泡となったことに堪えきれず、岩手は自害する。

以上の筋から、岩手が『弓張月』の阿公に当たり、恋絹が新垣に当たることが分かる。また、岩手は恋絹の腹から胎児を奪った後に、恋絹が自身の娘であることに気付くのであるが、阿公も新垣の死後に、彼女が娘であったと気付く。このように、『弓張月』の阿公と胎児奪取の件りは、『奥州安達原』の四段目切「一ッ家の段」から取り入れたのである。

では、双方の場面の相違点は何であろうか。『奥州安達原』の岩手は、自らの計策が失敗したことに対して苦しみ自害する。だが、『弓張月』の阿公は、自らの罪に対して懺悔し自害を試みるが、元の情人である紀平治に斬られてしまう。最期を迎えているのである。

ここで阿公の自害を阻止するのは、古い廟の内で阿公の懺悔を聞いていた為朝である。『弓張月』全体を通じて、阿公の懺悔と斬首の場面は、最も劇的な場面と言っても過言ではない。阿公の懺悔が終り自害しようとするその時、「老賊阿公自殺はさせじ。鎮西八郎（ちんぜいはちらう）源（みなもと）為朝（のためとも）、こゝにあり」という為朝の言葉とともに、為朝、王女、舜天丸、松寿、

紀平治が次々と登場する。そして為朝は、

かくて王子阿公が進退、鶴亀同胞が為体、これを窃聞、これを闕窺、の道理感ずれば、亦紀平治がいふよしあり。さるによつてが、先非を悔たる自殺をとゞむ。やよ、願ふにまかして阿公が、介錯許す。

（『弓張月』残編巻之三、第六十三回）

と、紀平治が阿公に厳罰を与えることを許すのである。この場面で主要人物らが立ち聞きをしていたと設定し、物語の展開をより劇的に描いているところにも注目したい。(1)

ところで紀平治は、阿公とかつて一夜の契りを結んだことを明かした後、次のように告げる。

われは短刀、妹は巻軸、これ再会の紀念にと、とりかはしつゝわかれ、家に帰りてが、おくりし物を披て見れば、琉球国の地図にして、風俗俚言にいたるまで、事精細に録したり。こは奇なることもありけり。わが先祖は琉球の、人なるよしは亡父の、物がたりにて聞たれども、書もとゞめし物はあらず。

（『弓張月』残編巻之三、第六十三回）

ここでいう「妹」と「淫婦」は、共に阿公のことを指している。紀平治は、阿公との出会いをきっかけに琉球の地図を手に入れ、そこには琉球の風俗や俚言が詳細に記されていたと述べている。この段を見るかぎりでは、紀平治の琉球に関する知識はこの地図から得たものと考えられる。かつて紀平治は、為朝が琉球に最初に渡った際、彼の道案内役を任されているが（『弓張月』前編第五回）、その時に登場した琉球の地図は、実は阿公からもらったものであることが、ここで明かされるのである。右の引用文の後に、「年来蔵めし彼処の地図が、主君の益にたちし夜玖島、彼郷導に倶し給へば」という紀平治の言葉が続き、阿公が為朝・紀平治の主従関係とも無縁ではないことを物語っている。

また、阿公と紀平治の関係のほかに、新垣や鶴亀兄弟との関係にも注目すべきである。阿公は懺悔の際、自らの血縁関係について語っている。新垣は阿公の娘で、また新垣の子・鶴亀兄弟が阿公の孫であることが、自ずとここに明かされる。前述したように、阿公と新垣の関係は『奥州安達原』に倣ったもので、さらに鶴亀兄弟とも血縁関係があると設定することで、より劇的な展開を見せているのであ

る。

阿公と新垣、鶴亀兄弟が血縁関係にあることは、『弓張月』の勧善懲悪を論じる際に、大変重要な意味を持つ。阿公が自らの罪を深く反省する際、鶴亀兄弟に自身を斬るように促す場面がある。この場面で阿公は、悪党・利勇の奸計によって悪事を犯したのであって、新垣が自らの娘であり鶴亀兄弟が孫であることは知らなかったと語る。そして鶴亀兄弟は、阿公が祖母であることを知り、彼女に留めを刺すことができない。阿公との血縁関係によって、鶴亀兄弟の敵討ち（母・新垣を殺し赤子を盗んだ、阿公への敵討ち）はその目的を失い、阿公は自害をもって罪の精算を試みることになるのである。だが、自害による罪の精算が許されないことは、これまでも述べてきたとおりである。以上のことから、阿公における奇遇な血縁関係は、極悪人には必ず悪報があるということを強調するために設けられた人物設定と考えることができるのである。

二、『八犬伝』の船虫と悪報

『八犬伝』は全一八〇回（一〇六冊）に及ぶ大作だけあって、多くの人物が登場する。『弓張月』と同じく『八犬伝』においても、登場人物の多くは善人または悪人に振り分けることができ、物語の中には彼らの善報や悪報が描かれている。殊更強調するまでもないが、『八犬伝』は、馬琴の勧善懲悪思想の集大成となる作品である。八犬士は仁義八行（仁義礼智忠信孝悌）の徳目のうちの一文字が書かれた珠を持ち、それぞれの名前にも徳目が一文字ずつ入っていることから、彼等は善を象徴する存在と考えることができる（例えば、犬塚信乃戌孝）。また、八犬士の周辺人物も善人である（例えば、伏姫、浜路、金碗大輔孝徳。特に、里見家に縁のある人物の場合）。一方、悪人としては亀篠、蟇六、船虫、蟇田権守素藤のような人物を挙げることができる。かつて前田愛氏は、本作品の悪人の名前は鳥獣虫魚にちなんで名付けられている場合が多いと述べた。[5]『八犬伝』では、人物の名前をもって、善人か悪人かを察することができる。本稿で考察する船虫も、名前から悪人であることが類推できる。

『八犬伝』において船虫の登場する段は、大きく四つに分けることができる。まず、船虫を中心にあらすじをまとめ、船虫が『八犬伝』随一の悪女である要因について考察する（四つの段名は、稿者が適宜名付けたものである）。

(1)武州阿佐谷の段（第五十二回～第五十三回）

小文吾は猪に襲われている並四郎を助ける。彼の妻は船虫である。その夜、小文吾は寝室に入った盗人を斬るが、それは金子を盗むために忍び込んだ並四郎であった。小文吾は船虫から詫びの印として尺八をもらうが、それはかつて彼女が千葉家より盗んだ名笛「嵐山」で、小文吾に盗みの罪を負わせようとしかけたのであった。実は、船虫夫婦は旅人の金子を盗み、時には人殺しまで働き暮らしていたのである。小文吾への企みが失敗し、船虫は一旦千葉家の家臣に捕らえられるが、その後、逃走する。

(2)下野庚申山の段（第六十二回～第六十七回）

船虫は赤岩一角（実は化け猫）の後妻として生きている。船虫は義理の子・角太郎の妻・雛衣（ひなぎぬ）に自害を勧める。現八の矢に射られた一角の眼を治すためには胎児の肝が必要で、この時、雛衣は子を孕んでいたのである。雛衣が自害すると傷口から球が飛び出し、一角を攻撃する。ここで一角の正体が暴かれる。船虫は捕らえられ連行されるが、途中で逃走する。

(3)越後小千谷（おぢや）の段（第七十五回～第七十七回）

眼病を患っている小文吾は治療のために瞽女（ごぜ）を雇うが、その瞽女は船虫であった。小文吾に眼病があることを知った船虫は、偽の瞽女となって元の夫・並四郎の敵討ちの時期を待っていたのである。船虫は小文吾を襲うが失敗する。この時、船虫は山賊の酒顛二（しゅてんじ）と夫婦の縁を結び、賊婦として暮らしていた。船虫は山賊らと共に小文吾を再度襲うがまたもや失敗し、夫・酒顛二は小文吾と荘助に討たれてしまう。船虫は山賊の媼内（おばない）と二人で逃走する。

(4)武州司馬浜の段（第九十回）

船虫と媼内は夫婦である。船虫は武蔵国司馬浜で辻君となり、強盗や殺人を働きながら生計を立てている。そんなところを小文吾に見つかり、船虫は六犬士に捕らえられる。妻を助けるためにやって来た媼内と共に、船虫はこれまでの悪行の報いとして処刑される。

以上が、船虫を中心とするあらすじである。(1)「武州阿佐谷の段」、(3)「越後小千谷の段」、(4)「武州司馬浜の段」における船虫は、盗賊の妻として、強盗殺人を犯して生計を立てているという共通点がある。また、(2)「下野庚申山の段」の船虫は、強盗殺人にまでは至ってないが、夫の眼

を治すために、嫁に自害を勧め、胎児の肝を得ようと試みている。以上の船虫の事跡を見ると、彼女は馬琴読本における極悪人の条件を十分に満たしていると言える。

しかしながら、これらの悪人的要素は、馬琴の勧懲観に基づく独自の特徴とは言い難い。他人の金子を盗んだり、金子を狙って人を殺したりする行為は、馬琴以外のどの作者の作品でも悪行とされているからである。右に掲げた理由の他に、馬琴が船虫を悪人とした理由があるのではないだろうか。

馬琴の勧懲観の基準から、船虫が悪人といえる第一の理由は、彼女が貞節を守らなかった点にある。『八犬伝』で船虫の夫として登場する人物は、計四人（並四郎、一角、酒顛二、媼内）に及ぶ。馬琴の勧懲観においては、女性にとって夫に対する貞節を守ることが何より大切である。[6] つまり、船虫のように四人もの男を夫とする女は、馬琴の勧懲観に即して考えると、紛れもない悪人なのである。

小文吾歯を切りて、「這船虫は三たびまでの妻に做りて、悪を資けしのみならず、某を害せんとしつるも二度に及びたり。類稀なる賊婦にこそ」と敦圉猛くれば、現八も亦拳を擦りて、「這奴は三たびの妻になりたるのみならず、赤岩にては妖怪の後妻になりて、犬村生夫婦を冤げ逼りてを害したり」といへば、（下略）

（『八犬伝』第八輯巻之八下套、第九十回）

この小文吾と現八の言葉からも分かるように、盗賊と三度、妖怪と一度、夫婦の縁を結んだことが、船虫が悪女とされる根拠である。物語の中で彼女は賊婦と呼ばれている。四人の夫が盗賊や妖怪であるということもさりながら、それ以前に、四人もの夫を持ったこと自体が、船虫が悪人である根本的な理由である。その上、さらに船虫は、辻君をして生計を立てたりもしている。『石言遺響』において、遊女屋に身を売ろうとした孝女・小石媛の悪報を描いたことからも明らかなように、[7] 貞節を破る女性の行為を悪ととらえていた馬琴の勧懲観から見て、船虫は悪人の最たる者であったのである。

馬琴の勧懲観の基準から、船虫が悪人といえる第二の理由は、八犬士と対立したことにある。先にも述べたように、八犬士は善の象徴である存在で、『八犬伝』では、里見家や八犬士に従う者は善人、背く者は悪人という、明確な善悪の区分がなされている。『八犬伝』全体を通して、仁義八行の分身である八犬士の行為は、悪行としてとらえられる

ことはない。このように、八犬士を絶対的な善人として扱う発想が、敵対する船虫を悪人と見做す理由の一つとして機能していることは明らかである。

ところで、船虫が夫・並四郎の敵を討つために小文吾を狙うことは、貞とは言えないのだろうか。(3)「越後小千谷の段」で、船虫は「いかで那奴を狙撃て、前夫並四郎の怨を復さばや」と言い、偽の瞽女となる。なぜ、船虫は夫に対する貞節を見せていながら、善人ではなく悪人として描かれているのだろうか。

そもそも、並四郎が斬られたのは小文吾の金子を盗もうとしたからである。小文吾は部屋に忍び込んだ強盗を斬り殺しただけであり、強盜が並四郎だということは知らなかった。並四郎の死は、日頃の悪事に対する悪報にほかならない。馬琴読本では、その妻・船虫が夫の敵を討つといっても、悪人の敵討ちが善の行いとして描かれることはないのである。

次に、船虫の最期について考察する。船虫の最期は、馬琴読本の他の悪人に比べて、最も残酷な形で描かれている。次は、船虫の最期の様子である。

小文吾、現八は、牛の後に立よりて、手をもて尻を

II（石＋旂）と拍つ。拍れてむ牛鬼は、ものこそいはね媼内と、船虫を仡と睨へたる、程しもあらず那をも這をも、長尖れる角をもて、腋下より肩尖まで、串きく怒牛の勢ひ、地獄の呵責を目前に、受てむ、媼内、眼血走る顔の色、赤くなり又蒼くなりて、腹に波うつ大叫喚、串るゝこと数番にて、やうやくに息絶しかば、有繋に勇む六犬士も、這光景に蕭然と、思はずも目を合しけり。

（『八犬伝』第八輯巻之八下套、第九十回）

六犬士がお互い物寂しげに静かに目を合わしたというのは、あまりの残酷さに船虫の死の場面から目を逸らしたことを意味する。処刑を行った当事者である六犬士ですら目を逸らしたと記すことで、船虫の受けた強烈な悪報を読者に伝えている。他の馬琴読本における悪人の悪報を見ても、これほどの描写がなされた例は見当たらない。

ところで、船虫の悪報が右の死刑だけで終わっていないところに注目したい。『八犬伝』第九十一回には、船虫の死後の出来事に関する挿話が設けられている。その内容は次のとおりである。

かつて媼内・船虫夫婦は、鬼四郎の赤牛を盗んでいた。牛泥棒を追って司馬浜までやって来た鬼四郎の隣人等によって、媼内・船虫夫婦の死骸と赤牛が見つかり、彼等の背に書き付けられている文からその悪事が明らかになる。結局、二人の首は浜辺に掛けられることになる。また、赤牛は盗賊夫婦を殺した功績を認められ、寺に送られることになる。

船虫の死骸に書き付けられていた文によって悪事が露わになり、彼女の首が掛けられたという、短い挿話である。船虫の物語の後日談として捉えることもできようが、実はまだ船虫の悪報が終わっていない点に注目すべきである。

この挿話の後、船虫に言及する登場人物の言葉は見られるものの、しばらく別の物語が繰り広げられる。ところが、第九十六回に至って船虫のさらなる悪報が見られる。浜辺に掛けられていた媼内・船虫夫婦の首が、穴栗専作によって盗まれたのである。その目的は、曝し首となっていた自らの味方の首を海に沈め弔うために、二人の首を身代わりにすることであった。しかしながら河鯉佐太郎孝嗣（後の政木大全孝嗣）は、味方の罪を隠すために他人の首を曝すとは小人の行為にほかならないとこの行為を批難する。ただ孝嗣は、船虫のことに関しては、

只那強人夫婦の者の、罪悪不思議に露れて、這擾乱の折にしも、忽地梟首せられしは、佞人們の手を借りて、那天罰を示されけん。神の威霊歟、仏の利益歟、世は是澆季に及ぶといふとも、その事なしとすべからず。それかあらぬか、最奇なり。

（『八犬伝』第九輯巻之三、第九十六回）

と、専作の奸智によって彼等の罪悪が人々に暴露され、天罰が下されたのだと考える。船虫の悪事がより多くの人々の目に留まることで、彼女の悪人ぶりは再度罰せられたも同然である。船虫の悪報は、強烈で猟奇的な死刑の後にも続いているのである。

三、「懲悪」の理念

浜田啓介氏が「馬琴は登場人物とモデルとなった史上人物との善悪対照や、登場人物の善悪と生涯の栄辱との関係に十分の用心を加える事となる」と述べているとおり、[8] 馬琴は作品の登場人物と歴史上の人物の善悪関係が照応するように、十分な配慮をしている。虚構であっても、史上で

善人とされている人物を悪人に、また悪人とされている人物を善人に描くことは、馬琴にとって、あってはならないことだったのである。こうして形成された勧懲観は、次第に倫理的整合性に適うか否かが問題となっていく[9]。天保十五年に成立した馬琴の自作批評『著作堂旧作略自評摘要』（以下、『略自評』と略称）において、馬琴の倫理的整合性に関する記述が見られるので、その一部を次に引用する。

(1)後に至りて、亀王は白川湛海と仮名して、夫婦、俊寛に仕たれども、させる功もなく、夫婦ともに身を殺して、前悪を謝するに至るは、歌舞伎狂言浄瑠璃本などにはあるべきことながら、勧懲を正しくしぬる己が筆には似げもなき第一番の拙作にぞありける。

（『略自評』「俊寛僧都嶋物語[10]」）

(2)『月氷奇縁』の如き新奇は多からねども、勧懲正しければ見るに足れり。

（『略自評』「勧善常世物語」）

以上の例から、勧懲が正しいか正しくないかが、馬琴の勧懲観において最も重要な要素であったことが窺える。言うまでもなく、物語において勧懲に正しい設定とは、善人に善報が、悪人に悪報が与えられることを意味する。しかしながら、馬琴が『略自評』にも記しているとおり、作品中において勧懲が正しくない場合もある。(1)の『嶋物語』における亀王夫婦の死は、馬琴の勧懲観に照らし合わせると、勧懲に正しくない設定なのである。

倫理的整合性に適っている作品を書くということは、馬琴にとって作者の心構えとして最も大事なことであった。そうした馬琴の倫理観を、中村幸彦氏は「人生の理法」と呼び、戯作であっても勧懲があるべきで、思想を持たなければならないという馬琴の考え方を指摘した[11]。その上で、馬琴は戯作者として、作品の娯楽性を高めていたのである。

ところで、馬琴読本では、善人であるからといって必ずしもめでたい結末を迎える訳ではない。むしろ善人であるにもかかわらず、悪人の手によって命を落とす場合が多く[12]、読者としては善人の死に疑問や違和感を感じることも往々にしてある。また、善人に善報があるにしても、悪人の悪報に比べると、さほど印象には残らない。馬琴は流行作者として多くの読者を得るために、強烈な場面を描かざるを得なかった。『弓張月』の阿公が新垣の腹から胎児を盗み出す場面をわざわざ挿絵として掲載したのも、猟奇的・刺激的な場面を描き、その悪行を強烈に印象づけるためなのである。序文で述べているように、「婦幼」への教訓となる

か否かはさておき、この挿絵は悪人への悪報を強調するには十分な効果を示している。「懲悪」を描くことは多くの読者を引き寄せるためであり、また悪事を行うと悪報があることを読者に見せつけるためでもあった。

もちろん「懲悪」を強調している馬琴が、「勧善」を全く考慮しなかったわけではない。『略自評』では、作中で善人を死なせてしまったことに対する後悔を吐露している。次に該当箇所を挙げる。

(1)況亦仮清水冠者の大太郎・宇野の小太郎夫婦及唐糸の如き、忠信節婦数を尽して枉死の事は、当時の看官惨刻を歓ぶ故にはあれど、今にして是を思へば後悔なきにあらず。（『略自評』「頼豪阿闍梨怪鼠伝」）

(2)又憶ふに松の前と鶴の前の死は実録にあはせんとての所為也。実録に合ずとも、この母女は死なざるをよしとすべし。今にして予をもて是を見れば、後悔尚多かり。（『略自評』「俊寛僧都嶋物語」）

(3)善人の横死は勧懲に害あり。当時思ひの足らざりし後悔かゝること多かり。（『略自評』「標注園雪前編」）

(1)『略自評』「頼豪阿闍梨怪鼠伝」で善人を死なせた理由を、読者が残酷な場面を好むことを意識したためであるとし、『略自評』の書かれた天保十五年には、このことを後悔していることが分かる。(2)『略自評』「俊寛僧都嶋物語」でも、善人として登場する、俊寛の妻・松の前、娘・鶴の前の死に対して、馬琴は「後悔尚多かり」と記している。馬琴は自らの勧懲観に相応しくない設定であったにもかかわらず、実録に合わせるために彼らを死なせたのである。また、(3)『略自評』「標注園雪前編」でも、善人の死を書いたことを後悔する、馬琴の心中が窺える。

ところで、『略自評』全体を通して、馬琴がこのように後悔の念を示しているのは、善人を死なせた場合のみである。悪人の悪報を描かなかったことを後悔する記述は見られないことから、馬琴は「懲悪」に対しては揺るがない態度をとっていたと考えられる。しがたって、『略自評』において、善人に比べて悪人への言及は少ないと考えてよい。次は、悪人に言及した数少ない例の一つである。

後編五冊は文化九年壬申の愚筆にて、唐山の小説によらず、こと皆作者の肚裏より出し来れる。善吉・お六が賢良にして至功至義なるもて美談となすべし、遅也・お丑が邪淫毒悪、憑司・昌九郎が残忍奸智、よくそ

の趣を尽して自然の如し。此編善人の枉死するものなく砥公の誠断に至りて、悪人皆誅戮せらる、抑又愉快ならずや。

（『略自評』「青砥藤綱摸稜案」）

傍線部から分かるように、『略自評』「青砥藤綱摸稜案」では、善人の横死を描かず、悪人への悪報をはっきりと描いたことを快く思う心境が述べられている。このように、馬琴は悪人に悪報を与えることに対する明瞭な態度を示していたのである。

水野稔氏は、「馬琴の小説には悪人の描写にすぐれたものが見られるという定評はたしかにその通りであるが、それは一方において対照させるべき理想的な善が用意されており、因果の理をあてはめるために思うままな悪の跳梁を許した結果にほかならない」とし、[13] 馬琴小説において悪が強調されるのは、理想的な善が用意され、それと対になる悪を描くためであると述べた。この点について、阿公と船虫を例に挙げ検討してみる。

まず、『弓張月』の悪女・阿公は、他の悪人である曚雲や利勇に比べて、著しい存在感を示している。この三人の悪人のうち、為朝一党と深い関わりを持つのは阿公のみである。いうまでもなく、為朝一党は善人側に立ち、悪人側の阿公とは対照関係に置かれている。特に、鶴亀兄弟の場合、阿公の懺悔の後、彼女が祖母であると知ったところで敵討ちを続けることができず、孫としての情けを全面的に表している。とすれば、彼らの態度に「孝」や「仁」の徳目を当てることが許されるのではないか。鶴亀兄弟は始終母・新垣への孝心を見せているが、母の敵である祖母・阿公に対しても同じく孝心を見せることになる。このように、阿公の悪が強調される一方で、鶴亀兄弟の善がより際立って描かれているのである。

次に、『八犬伝』の悪女・船虫は、数人の夫を持ち、彼等に強盗殺人を働かすなど、その悪行は著しい。この船虫と対照すべき善女には、例えば「七烈女」がいる。浜路・沼藺・妙真・音音・曳手・単節・雛衣を、馬琴自ら「七烈女」と称していることについては、以前、『怪鼠伝』に見える「貞」の徳目を論じる際に述べたことがある。[14] また、このうち浜路と雛衣は「貞」のために命を落としており、『八犬伝』における「烈女」には女性の「貞」の一面があるということも指摘した。『八犬伝』の「下野庚申山の段」において、船虫は雛衣に自害を勧め、雛衣は夫・角太郎の孝を守るために自害を決行する。ここに、夫に対する雛衣の貞心を読み取ることができる。すなわち、「貞」を基準として考えた

時、「貞」を破った悪女・船虫と対照関係に置かれているのは、「貞」を守った善女・雛衣なのである。ここでも、船虫の悪が強調される一方で、雛衣の善がより際立って描かれている点が注目に値する。

以上のことから、馬琴読本において善と悪は密接な関係に置かれていることが分かる。作品の娯楽性を高めるために「懲悪」が強調される傾向は明らかで、その一方で、「懲悪」の強調は「勧善」の強調にも繋がっているのである。

おわりに

歌舞伎・浄瑠璃作品に「もどり」という作劇法がある。これは、最初、悪人として描かれていた人物が、筋の進行に連れて善心に立ち戻ることを言う。悪人だった時の所行は、本心から悪事を行っていた場合もあり、また、実は主人公や他の人物のために悪人を装っていた場合もある。歌舞伎・浄瑠璃作品では、悪人が重傷を負い、瀕死の状態でこれまでの悪行の真意を告白することで、この「もどり」の演出をより劇的なものにしたりする。『菅原伝授手習鑑』の四段目「寺子屋」、『義経千本桜』の三段目「すし屋」、『仮名手本忠臣蔵』の九段目「山科閑居の段」などが、「もどり」を用いた代表的な作品である。

この「もどり」の趣向を、本稿で考察した『弓張月』の阿公と『八犬伝』の船虫の場合に当ててみると、馬琴の「懲悪」を重視する態度が浮かび上がってくる。阿公は、鶴亀兄弟に斬られ深い傷を負い、新垣や鶴亀兄弟との血縁関係を解き明かし懺悔する。しかしながら、阿公の罪の精算は為朝によって制止され、彼女は紀平治の刀に斬首される。阿公の「もどり」は、このようにして最終的に拒まれたことになり、『弓張月』随一の悪女の悪報は揺るがず描かれている。一方、船虫は阿公の場合とは別に、「もどり」の趣向が用いられていない。生計のため、また夫の敵を討つために、悪事を繰り返す船虫には、死の直前に懺悔する機会すら与えられない。馬琴読本において最大の悪報を受けた船虫は、ひたすら悪人として描かれているのである。

【注】

（1）後藤丹治校注『椿説弓張月』上「解説」（日本古典文学大系六十、岩波書店、一九五八年）に、次のようにある。

悪人の描写も弓張月の注目すべき一特色である。前にも述べた如く、馬琴の読本は道義的・教訓的な立場から書かれ、そこに現われる主要人物は行（おこない）の正しい忠義な武士とか貞操な女性が多く、そういう善人の対照としてま

た必ず奸悪な人物がはびこっている。しかもそうした馬琴の読本で、善人の描写よりも悪人の方が巧みに描かれているのは馬琴研究家の能く口にする所であるが、奇妙な事実というべきであろう。

（2）注（1）の後藤丹治「解説」に、次のようにある。（引用に際して、ルビを付し、強調点「、」を傍線に直した）

弓張月全編の上にも部分的にも因果応報という考え方は著しいのであるが、しかも勧懲的なものはここには十分に現われていない。わずかに第廿五回で、源氏三代、その終りをよくしないことを叙し、「夫はじめ俑をつくるものすら、聖人これが後なきをり。況てその父を殺すの、かくのごとくならざることを得んや。これを見、彼を思ふにも、世の童子等忠孝もつとも忽にすべからず。只おそれてもおそるべきは、自作せる孽也」と論断した個所に、その片鱗を示しているに過ぎないのであって、「勧懲」の文字を使って露骨にこれを標榜したものは弓張月には見えていない。勧懲思想は弓張月と前後して著作された俊寛僧都嶋物語・三七全伝南柯夢・頼豪阿闍梨怪鼠伝・墨田川梅柳新書・新累解脱物語・旬殿実々記などには著しいのに、ひとり弓張月には、それがさのみあらわでないのも注意せられるのである。

（3）馬琴が『羇旅漫録』（享和三年刊行）において、『奥州安達原』に言及していることについては、後藤丹治校注『椿説弓張月』下「補注」三八（日本古典文学大系六十一、岩波書店、一九六二年）に指摘されている。なお、『羇旅漫録』九十七「乞丐女六が墓　附評」における該当箇所を次に引用する。

安達が原の浄瑠璃（ママ）本に、六といふ乞食女酒をのむことあり。この六が事を書しもの、よし。六生涯さけをこのめり。

引用は、『羇旅漫録』（日本随筆大成〈第一期〉一、吉川弘文館、一九七五年）による。

（4）洪晟準「稗史七法則「省筆」における「偸聞」」（『国語と国文学』第九十一巻第五号、二〇一四年五月）参照。

（5）前田愛「『八犬伝』の世界」（『文学』第三十七巻第十二号、岩波書店、一九六九年十二月）に、次のようにある。

約三百人以上にも及ぶ「八犬伝」の登場人物の命名には名付け親の馬琴も苦心したらしく中には書名をもじった反橋雑記（板橋雑記）などの変り種もまじっていて苦笑を誘われるが、アレゴリイとしての「名詮自性」を働かせる馬琴の意図はほぼ忠実に実現されていると考えていい。そのひとつが誰でも気づくことながら、鳥獣虫魚にちなむ語を人名に象嵌する手法である。（中略）その名に象嵌されている鳥獣虫魚の文字は、かれらが具有するさ

まざまの獣性―卑劣・奸佞・邪智・狡猾・残忍・冷酷・邪淫・利己心などの索引にほかならない（主要な悪のワキ役を演ずる蟇六・亀篠・船虫・蟇田素藤らは両棲類・爬虫類・甲殻類などのグロテスクな爬行性動物の名前を与えられている！）。

（6）洪晟準「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造―唐糸の物語を中心に―」（『国際日本文学研究集会会議録』第三十七号、国文学研究資料館、二〇一四年三月）、洪晟準「馬琴の勧懲観―『石言遺響』を中心に―」（『国語と国文学』第九十三巻第七号、二〇一六年七月）参照。

（7）注6の拙稿「馬琴の勧懲観―『石言遺響』を中心に―」参照。

（8）浜田啓介「「勧善懲悪」補紙」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年）。

（9）「倫理的整合性」は、浜田啓介氏が馬琴の勧善懲悪の正不正について述べる際に用いた言葉である。同氏は「馬琴は小説上に表明される思想の倫理的整合性について意を用いた」とし、勧懲を正しい正しくないと言うこと自体、文芸上における思想的営為であるとしている。（注8の浜田啓介氏の論文参照）

（10）引用は、神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評―石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』―』（汲古書院、二〇一三年）による。

（11）中村幸彦「滝沢馬琴の小説観」（『近世小説』第六巻、一九六三年十月）に、次のようにある。

かくて馬琴の小説観の到達した所は、彼が勧懲と称した所の人生の理法を、作品の架空の人生の中にも、隠微の法によって、こっそりとしのび込ませねばならぬ。かそけき戯作、翫物といえども、勧懲がなければならぬとは、戯作も亦思想を持つべしとの論であった。これが小説の第一義で、二、三と数え来たった虚誕も人情も通俗も皆、この目的の為のものであったとも解釈出来る。その形で、彼の小説観の諸要素が有機的な結合をなすのである。

（12）『略自評』「石言遺響」に、次のようにある。

しかるに其女児小石媛も、本性純孝月小夜に劣らず、母の遺志を続まく欲して、反て強盗に殺されしを、今思へば勧懲の為に宜しからず。

『石言遺響』においては、「懲悪」が「勧善」より重視されていることが分かるが、「孝女」と讃えられる善人の月小夜姫と、「妬婦」と呼ばれ悲惨な最期を迎える悪人の万字前とを比較してみると、後者の人物像の方が格段に強烈な印象を与える。注6の拙稿「馬琴の勧懲観―『石言遺響』を中心に―」参照。

（13）水野稔「馬琴文学の形成」（『文学』第三十六巻第三号、一九六八年三月）。

（14）注6の拙稿「『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造―唐糸の物語を中心に―」参照。